

研究ノート

国際学生寮での会話にみられる 居住者間の関係性の変化

——収集したデータとインタビューをもとにした事例研究——

川 上 ゆ か

Abstract

For the purpose of visualizing the relationship building process and its change over time between people with multicultural backgrounds with various languages and cultures in a multimodal way, we collected about 30 minutes of daily conversation between 2 Japanese students and 4 international students at an international dormitory 9 times, and then conducted an interview on this research cooperation individually.

In this paper, we first examined whether there were any changes in the relationship between the six participants, based on the analysis of their follow up interviews. Next, using the conversation analysis, we tried to describe and examine the actual communication that triggered the change in one international student's relationship with others. In the interview, when the international student talked about a change in relationship with others, the term “talk, snack, change, say, know, interesting, alien, first, second floor, different” was used frequently and was important. In addition, there was a strong connection between words such as “way of thinking/different,” “relationship/change,” and “six people/gather/interesting.” We mainly focused the laughter and teasing that took place shortly after the initial data collection, when the word “first, the second floor, six people/gather/interesting” appeared, and analyzed what elements of others were joked and what they were trying to do in the conversation. In that conversation, the international student, who had seldom come to the shared space on the second floor of the dormitory until she joined this research cooperation, was made fun of by “the people who often come to the second floor” as “a person who seldom comes to the second floor.” At first, the international student refused to be teased, but by explain-

ing why she had not come to the second floor often, she created an opportunity to become a member of the participants and work together.

From this observation of data, we can see that through the accumulation of conversations, they share each other's experiences, values, etc., and through that, they engage in confrontation as teasing or play, and through laughing together, their relationships gradually become closer.

Keywords: multi-party conversation, contact situations, relationship building process, teasing

1. はじめに

日本社会の国際化、多文化共生化推進の流れを受け、高等教育機関では、国際社会で活躍できる高度人材の育成を目的とし、国際共修や多文化クラスなどによばれる問題解決型タスクを用いた留学生と日本人学生による協働学習が実践され、その知見が積み重ねられている(末松他, 2019; 杉原, 2010; 山田, 2016等)。杉原(2010)は日本人学生と留学生によるグループ活動における相互行為上のふるまいや発話量の非対称性¹⁾について指摘している。山田(2016)は目標達成型のグループ活動において相互の協力は見られたが、お互いの異なりを出し合う機会や真に相手を理解する対話につながってはいないとしている。

多文化背景の者同士が違和感や誤解を乗り越え、文化的差異を認めつつ異なりを出し合い、対等な関係を築きながら、真に相手を理解する対話をすることは可能なのか。筆者は、ことばや文化を越えた関係構築のプロセスとその経時変化の実態を言語・非言語両面から可視化し、相互理解教育を実践するための学習環境デザインの基盤構築を目指している。その足掛かりとして、多文化背景の者同士が行う会話を収集し、相互行為を分析している。

本稿では、まず、国際学生寮での会話データ収集協力者である日本人学生2名と留学生4名に行った事後インタビューの語りから、6名の関係性の変化の有無を探る。そして、他の協力者との関係に明らかに変化のみられた一人の留学生をめぐる変化の契機を、インタビューの語りの分析から得られたヒントをもとに、実際のやりとり場面を取り上げ、会話分析を用いて、観察・考察を行う。研究協力者の6名は、何者として会話の場に参加し(串田, 2006; Sacks, 1972)、この留学生の何をからかい(Drew, 1987; 今田, 2015; 水島, 2006等)、笑うことで(Glenn, 2003; Jefferson, 1974)、互いの関係性を変化させていったのか、その一端の記述を試みる。

2. 背景と目的

2-1. 日本人学生と留学生の関係構築

国際社会で活躍できる高度グローバル人材育成を目指す高等教育機関では、日本人学生と留学生がともに学び合う環境づくりを進めているが、円滑な関係構築は進んでいないと言われている（田中, 2003；横田, 1991；一二三, 2006）。先行研究では、留学生と日本人学生の間での親密化は留学生同士、あるいは日本人学生同士に比べて難しく、その関係構築の阻害要因として「文化間距離」や「言葉の障壁」、日本人の「希薄な主張」や留学生の「日本人集団への消極的アプローチ」等が挙げられている（田中, 2003；横田, 1991）。

工藤（2003）は友人関係を「対等性と主観性が高く、コミュニケーションによってその概念、ルール、関係が調整される対人関係である」（同：18）とし、友情形成における留学生のコミュニケーション能力をモデル化している。留学生と日本人学生の友人関係構築の過程には4つの段階があり、第1段階で物理的・機能的・社会的近接性による日本人との最初の接触が起こり、第2段階で接触・共行動・自己開示を通して友人観の形成・相性などの合致度を確認、第3段階ではその断続性により我々意識や一体感といった関係的アイデンティティを形成し、第4段階でこの関係的アイデンティティを強化するとしている。しかし、第1段階や第2段階で留まり、表面上の接触で終わることも多いと指摘している。

山川（2013）は、日本人と留学生とが一緒に住む混合学生寮に居住する3名の留学生とその寮内の日本人の友人各2名ずつ、計9名にインタビュー調査を行っている。その結果、寮内の「ルールの共有」により対等な関係が促進されやすく、「留学生と日本人」から「寮生」というアイデンティティを生み出し、寮内のイベントなどで「時間や空間の共有」による関係づくりが可能であったこと、それが「留学生と日本人」から「友人同士」という関係を構築していることがわかったと述べている。そして、日本人学生と留学生とが共に住む混合学生寮は工藤（2003）の示した第4段階まで実行可能な場であるとしている。

日本人学生と留学生の関係構築、親密化にかかわる研究においては、「留学生」と「日本人学生」という二項対立で捉えられること、また、言語や文化的な差異がその障壁となっていると述べられているものが多い。しかし、日本人も多様化する現在、個別の具体的な文脈でのデータ収集とその分析の蓄積も求められる。また、仲間意識の強化が可能な場と言われる国際学生寮においても、日本人学生と留学生との間だけではなく、留学生同士の関係も表面的に終わることはしばしばある。実際、今回取り上げる留学生は、データ収集参加の機会がなければ、他の協力者と表面的な接触で終わっていた可能性が高い。表面的な関係であることが必ずしも問題だとは言えないが、本稿では、一時的な時間や空間の共有ではあったが、研究協力で「集まって話すことにより関係に変化が見られた」という事後インタビュー

の語りから、個別の文脈において、一人の留学生の変化を見ていきたい。

2-2. からかい

大津 (2004) は Brown & Levinson (1987) の15の主要なポジティブ・ポライトネス・ストラテジー²⁾の中の「冗談」を用い、日本人の友人同士が冗談で相手の悪口を言ったり、わざと反論したりして一時的な対立関係を作る場面に注目し、親密な関係づくりに貢献する「遊びとしての対立」の分析をしている。そして、起こっている対立が「遊び」であることを参加者が互いに伝え合うために、発話の繰り返しや韻律の操作、大きな感情表現、スタイル・スイッチング、そして、笑いが合図として用いられると述べている。

親しい者同士が冗談を言ったり、わざと相手を困らせることをしたりして、笑い合う行為には「からかい」と呼ばれるものもある。水島 (2006) は、話者が受け手への攻撃や中傷を楽しむ一方的なコミュニケーションと捉えられる「からかい」を、親しい者同士においては「笑いや可笑しみを生む「遊び」の手段として疑似的に用いられ、ラポールの形成に貢献する」とし、「当事者間の相互的なやりとりで重きを置くタイプのコミュニケーションである」と述べている (同: 54-55)。この「からかい」をめぐる相互行為を分析した Drew (1987) は、からかいは、その対象となる隣接した先行する発話・行為に対する応答として組織されるとしている。そして、その隣接した先行する発話・行為は度を越した文句や賞賛、間違いなどで、からかひの発話につながる特性を持っていると述べている。また、からかひの多くは、からかひの対象になる先行発話・行為にある種の疑義として組織されるため、からかわれた者はそのからかひがユーモアを含んだものであると理解していても、からかひを拒否し、修正するという真面目な応答をし、自らの評価や報告の正当性を守る立場を選択することも指摘している。

團 (2013) は公立中学校での参与観察とグループ・インタビューから、からかひの相互行為を分析している。からかひが参加者の間で共有された知識と結びついた成員性 (串田, 2006) を共有する形 (親しさの表れ) であるか、教員側が指導をすべき形であるかの境界となる活動としてその構造を分析し、それがトラブルとして理解されうる一つの基盤を示している。そして、その連鎖構造に、Drew (1987) の記述とは異なり、からかわれる者は自身の先行する発話や行為とは関係なく、きっかけとなる隣接ペアの第一成分の産出者 (からかう者) によって選択されること、また、からかひの後に必ずしも拒否や真面目な応答が来るとは限らず、ともに笑うものとしてその活動を展開することがあるとしている。

本稿のものと近いデータを用いたからかひの分析には、留学生と日本人学生の通時的な関係構築プロセスを「からかひ」や「冗談関係」、「褒めと自己卑下」による経験の共有と共感などを手がかりにフェイス³⁾ (Goffman, 1967) にかかわる現象と成員カテゴリー化装置の定

式 (Sacks, 1972) を用いて分析した今田 (2015) がある。今田は、からかひの対象はグループ間で共有認識とされたからかひの受け手の、外見や固定的属性から喚起されるイメージとは異なるその本人の、個性部分 (ケチである等) であるとしている。この個性部分をからかうことは、同じグループのメンバーの個性を理解している「わたしたち」は「仲間」であることを示しているという。そして、留学生と日本人学生のコミュニケーションにおいては、文化的・言語的な背景の違いや社会的属性ではなく、個別具体的な文脈や彼らの間で積み重ねられた共有経験と知識が、そのやりとりや円滑な関係構築に影響を与えていると指摘している。

本稿では、水島 (2006) の「からかひ」の定義を援用し、「笑いや可笑しみを生む遊びの手段として疑似的に用いられ、ラポールの形成に貢献する受け手への攻撃的な発話」や行為から開始する、関係変化のきっかけと推察されるやりとりを記述する。

2-3. 成員カテゴリー

社会の成員はそれぞれ、たとえば女性、大学2年生、日本人、3人兄弟の末っ子、塾講師などというように、潜在的に複数のカテゴリーの担い手であるが、ある会話において何者として参加しているのか、どのカテゴリーが前景化するかは会話に参加する成員同士で交渉されるものである。Sacks (1972) は人々がどのようにしてカテゴリー化を行っているのかを「成員カテゴリー化装置」に定式化している。

西坂 (1997) はこの定式化を用い、ラジオでのインタビューをもとに、「日本人」「外国人」であること、そして「異文化間」のコミュニケーションであることを、相互行為のなかで、参加者たちが協同で、その都度成し遂げていることを示した。接触場面研究においても、日本語母語話者と非母語話者間のコミュニケーションの実態を分析するためにこの装置は用いられており、「母語話者」と「非母語話者」といった対照的なカテゴリー対をもとにした非対称性や異文化性 (杉原, 2010; 森本, 2021)、選択される (スポーツ愛好家といった) アイデンティティ・カテゴリーが、日本語学習者と母語話者 (非対称性や異文化性) を結び付けるものに変化することで、非対称的なやりとりから対称的なものへと参加の様相が変化すること (岩田, 2005)、そして、留学生と日本人学生が「仲間」としてふるまう現象 (今田, 2015) などを明らかにしてきた。

からかひは、からかう者がからかひを受ける対象に何らかの評価をする行為であるが、その評価は対象のある側面を取り上げて行われる。これはある種のカテゴリーを付与することになるが、そのカテゴリー付与が何に帰属するものであるかは、その会話の場で参加者によって交渉される。本稿で扱う事例では、会話の場で交渉され、前景化するカテゴリー付与の糸口を事後インタビューの語りから探り、誰が何者として、ある留学生の何にカテゴリー

付与し、からかいの対象として発話するのかを示す。そして、からかいに対するからかいを受ける者の反応や他の参加者の反応が、この留学生をめぐる関係性の変化の契機となっている一端を記述する。

2-4. 目的

本稿の目的は、国際学生寮での9回の日常会話のデータ収集協力を通して、居住者である2名の日本人学生と4名の留学生の関係性の変化の実態を、1) 事後インタビューの語りから抽出し、2) その抽出された語りにみられる変化の契機となる実際の会話の断片を取り上げ、言語・非言語両面から視覚化することである。今回は特に変化が見られた一人の留学生(以下SF)をめぐる事後インタビューでの語りと、語りから抽出された笑いを含むからかいの相互行為の一部を観察・記述することで、関係性の変化のきっかけを示す。

3. データと方法

3-1. データ収集と対象者

分析対象は、国際学生寮に居住する日本人学生2名と外国人留学生4名による1回30分程度の自由会話9回と事後に個別に20分程度行ったインタビューである。以下の表1は6名のデータ収集時のそれぞれの状況、背景である。日本語を使用した自由会話のデータ収集は2019年6月から7月にかけて、国際学生寮2階にある共有スペースで行った。会話データ収集に際しては、事前に機材の扱い方を説明し、毎回研究協力者にビデオカメラと360度カメラ、ICレコーダーを設置してもらい実施した。データ収集の現場の配置は図1、またカメラの映像は図2の通りである。9回の会話場面の収集終了後、8月初旬に個別に20～30分程度、研究協力に関するインタビューを行った。質問事項は、表2のとおりで、ICレコーダーを用いて録音した。

データ収集には国際学生寮を使用するため、管理者に事前に利用の許諾を得て、居住者全員にも研究説明を行ったうえで研究協力者を募った。本研究は共通言語としての日本語を使用した会話の収集を目的としていたため、日本語上級レベルの留学生であることを条件に、上記表1の留学生4名を選定した。また、日本人学生2名は、留学生の生活面や学習面をサポートし、寮内外のイベント等を企画する立場で居住するレジデンス・アシスタント(以下RA)である。研究協力者6名には、事前に研究協力に関する詳細な説明を行い、同意書を交わしてからデータ収集を開始した。

国際学生寮での会話にみられる居住者間の関係性の変化

表1 研究協力者

記号	年齢	国籍	性別	学年／留学期間等
JF1	20代	日本	女性	大学4年・RA2年目・留学経験なし
JF2	10代	日本	女性	大学2年・RA1年目・短期海外セミナー経験あり
AM	10代	アメリカ	男性	交換留学生・2018.9～2019.8
CM	20代	中国	男性	交換留学生・2018.9～2019.8
KF	20代	韓国	女性	交換留学生・2019.4～2020.2
SF	20代	スロバキア	女性	交換留学生・2018.9～2019.8

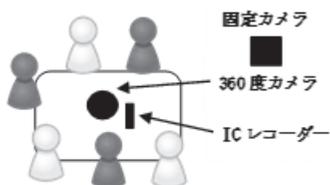


図1 データ収集の場



図2 固定ビデオカメラ・360度カメラの映像

表2 事後インタビューの質問事項

日本人学生への質問	外国人留学生への質問
1. 海外・留学経験の有無 2. RA 経験について 3. データ収集協力について ① 参加の理由 ② 他のメンバーとの関係（研究協力以前と現在） ③ 会話のテーマについて ④ 日本語使用について ⑤ 文化や価値観の違い・わかりあえないと感じたことについて 4. 自身の変化や全体的なコメント	1. 海外・留学経験の有無 2. 国際学生寮のシステムについて 3. データ収集協力について ① 参加の理由 ② 他のメンバーとの関係（研究協力以前と現在） ③ 会話のテーマについて ④ 日本語使用について ⑤ 文化や価値観の違い・わかりあえないと感じたことについて 4. 自身の変化や全体的なコメント

3-2. 方法

収集した会話データは映像、音声と同時に注釈ができる無料のアノテーションソフトウェアである ELAN⁴⁾を用い、発話と視線や手の動きなどの非言語行動の書き起こしを行った。本稿で事例として取り上げる断片では、話者にはそれぞれ表1の記号を割り当て、会話中の固有名詞も記号に置き換えた。また、事例の文字化にあたっては以下の表3「文字化のルール」を参考に書き起こしを行った。

事後インタビューは、表2に示した質問事項を1から4の順に雑談も交えながら行ったものをICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。

表3 文字化のルール

→	注目するターン	¥xx¥	笑いを伴った発話
[発話のかさなり	<u>xx</u>	音が大きい発話
-	音の途切れ	°xx°	音の小さい発話
=	二つの発話の密着	(xx)	聞き取れない発話
∴	直前の音の伸び	>xx<	速い発話
(2)	沈黙の秒数	<xx>	遅い発話
?	語尾の上昇	A>>B	Aの視線の方向(B)とその長さ
↑	直後の音の急激な上昇	A><B	AとBの視線の交差とその長さ
hhh	呼気(笑い)	((xxx))	注記, ジェスチャーの記述など

Jefferson (1974), 西坂他 (2008) の転記システムを参照

まず、事後インタビューの逐語録から、研究協力者間の関係や印象の変化にかかわる回答の整理を行った。次に、そこで使用されている内容やことばの傾向を把握するため、テキストマイニング⁵⁾による分析を行った。そして、その結果と6名の関係や印象の変化にかかわる語りにみられたキーワードを手がかりに、会話分析を用いて関係変化の契機となった実際の会話場面の断片を記述し、観察と考察を行った。

4. 語りから見える関係の変化

事後インタビューの質問項目の3.②「他のメンバーとの関係」に関する語り部分を抽出し、テキストマイニングを行った結果、「話す、お菓子、変わる、言う、知る、おもしろい、宇宙人、最初、2階、違う」といったことばの使用頻度および重要度が高かった。また、単語の共起を見ると、「考え方・違う」「関係・変わる」「一緒・授業・取る」「6人・集まる・おもしろい」のつながりの強さがみられた(川上, 2021)。事後インタビューの語りからは、「6人で集まるのはおもしろく、話すことにより、考え方の違いを知り、関係が変わった」と解釈することができる。

研究協力者間の研究協力以前の関係は、日本人学生同士はJF1がRAとしても大学の学年でも先輩で、JF2がJF1に対し敬語を使う間柄であり、これは研究協力後も変わっていない。ただ、JF1はJF2の留学生に対する接し方に参考になる部分が見られたと印象の変化を述べている。JF1、JF2、AMとKFは寮内外のイベントで頻繁に顔を合わせており、それぞれ個別にも親しくしていたという。CMとSFに関しては、他の参加者と会えば挨拶をしたり、話したりすることがあるという間柄であった。特にSFは、寮内の任意参加イベントに出席することなく、KFの言葉を借りると、「引きこもりみたい」であったという。ただ、来日

国際学生寮での会話にみられる居住者間の関係性の変化

表4 他のメンバーとの関係の変化に関する語りの抜粋

JF1	結構、変わりました。
JF2	開始当初は結構緊張感があると言うか、真面目な感じじゃなかったですかね。{中略} 真面目な感じだった気が。でも、だんだんお菓子とかがあるのに慣れてきて、{中略} ゆったりして遅刻する人もいたりとか、なんとなくほぐれてきて。
CM	仲良くなったみたい。みんなのことは少し知るようになりました。知ってた。(9回終わって?) もっと、知ってた。
AM	結構、みんなに話しますが、寮でそんなに話さないのはCMとSFかな。…もともと仲良かったんですけど、もっとしゃべるチャンスがあったかなって。
SF	特に私は、ちょっと宇宙人みたい。まあ宇宙人じゃなく、みんなはいつも2階で遊んでいたんで、私は外から入りました。(ちょっと宇宙人みたいだった。最初?) 私はそう感じたんですけど、すごく親しくなった気がします。

(質問者の発言)

時期が同じAMとは同じ欧米圏の留学生として普段から接触があったようである。

表4に6名の関係の変化に関わる語りを整理した。留学生をサポートする役割を担っているJF1は6名の関係性を「結構変わった」と評価している。また、同じ立場であるJF2は、最初の頃は「緊張感があった」が、徐々に「ほぐれた」と形容している。CMは他の5名と「仲良くなった」みたいだと述べている。他のメンバーとはもともと仲が良かったと述べたAMは、それまでは学生寮で「CMとSFとはあまり話すことがなかった」が、研究協力で会話するチャンスがあったという。そして、宇宙人のようだったと自身のことを形容する

表5 SFとの関係の変化に関する語りの抜粋

JF1	特にSFって2階になかなか下りてこなくて。私もどうやって仲良くなったらいいだろうと試行錯誤というか1人でも大丈夫みたいな感じだったので。話したくてもなかなか時間が合わなくて。
	9回もあったらSFのこととか聞けたり、それがやっぱり一番うれしくて。SFのほうからも、1回雨が降った時に傘取られちゃったから今日一緒に帰らないみたいな感じに言われた時にうれしくて。距離が縮まったのかなって思いました。
JF2	SFは通学時間がよく一緒になって話すんですけど、普段2階に降りて来ないので深い話はしたことがなかったです。
	最初はずっとチェコの子とペアで一緒にいましたよ。私は、去年は全く関わりがなくて{中略}ほかの留学生とは話しかけたりするんですけど、ちょっと話しかけづらい雰囲気でした。 関わって初めて「こんなに日本語上手なんだ」って思いました。{中略}それも初対面の人も物怖じせずっていうか、すごいなーと思いました。
KF	特に、SFと仲良くなりましたね。SFはあんまり授業以外には会えないから。これで話し合えた。{中略}一番変わったなと思うのは、SF。
CM	実はあんまり寮でSFと会ったことないから。先学期もSFと授業一緒に取ってないから。SF、話すの多い人と気づきました。

SF は、共有スペースの「2階」によくいていつも一緒に遊んでいるグループに「外から入った」と感じたが、研究協力を通して「すごく親しくなった気がする」と述べている。関係の変化を一番感じている SF に対する他のメンバーの語りを表5に整理した。

留学生をサポートする者として、JF1はそれまで寮の共有スペースがある「2階になかなか下りてこない」SF とコミュニケーションを取ろうと試行錯誤していたが、うまくいかなかったと述べている。それが9回の研究協力を通して、「距離が縮まった」とうれしく思っていることが伺える。JF2はRAになる以前の印象と寮内でのSFの印象が違ったこと、また、話はするが深い話はしたことがなかったと述べている。KFも関係性が「一番変わった」と思うのがSFであると述べている。

以下、国際学生寮では宇宙人であったSFが「2階に下りて」きて、他の5人と話すことで、「すごく親しくなった気がする」となるきっかけを、語りにみられた「2階」「おもしろい」「6人(のメンバー)」「集まる」が現れる場面(事例1)をもとに紐解いていく。

5. 実際の会話例

これから以下、まず、初回のデータ収集開始42秒からの約40秒間行われたやりとりの断片を取り上げる。6名の座っている位置は図3のとおりである。直前に機材の動作確認とお菓子の分配が終わり、本格的に初回のデータ収集を開始する場面である。

5-1. 初回の緊張感とSFへのからかいの開始

事後インタビューでのJF2の語りにもあったが、研究協力の初回であること、この6人で集まるのが初めてであること、また、機材の動作確認に手間取ったこと、そして、録音・録画されること等によるものと推察される緊張感と気まづさが伺える。直前にお菓子の分配が終わり、1.5秒の沈黙の後、01JF1は斜め向かいに座っているSFに視線を向け、笑いながらKF、AMの順に一瞥している。これはのちに03/05/07JF1の発話に展開する視線と笑いとなるが、この01JF1をAMは目視している。そして、02AMは声色を変え、高い音域で、JF1と視線を合わせながら、「じゃ、みんなお元気ですか」と発話し、笑っている。この発話は「みんな」と言っ

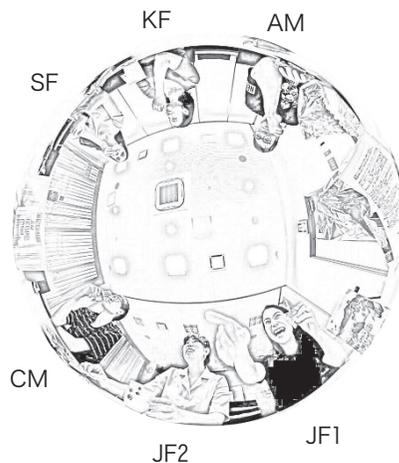


図3 07JF1「HAHAHA」

向ける。07JF1は、SFを人差し指を使って指さすことにより、ここにいる変な感じがする面白いメンバーはSFであることを明示し、事後インタビューでも語られていた「2階に来ない人」カテゴリーの付与をし、笑いを伴いつつ、SFをからかいの対象に選択する。

Drew (1987) は、からかいは、対象となる隣接した先行する行為に対する応答として組織され、その対象となる先行する行為は度を越した文句や賞賛、間違いなどであることが多いとしているが、この事例では、SFはからかいの対象となる直接的な隣接した先行する発話や行為をこの会話の場では行っていない。ここでのからかいの資源として考えられるのは、会話に参加する一部（あるいはSFを除く5名）のメンバー間（特にJF1とAM）に共有される「SFは2階に来ない人」という共有の認識である。そして、この初回のデータ収集開始時点において、SFは「2階に来ない人」というカテゴリーが「2階によくいる人」たちによって付与され、その非対称性が資源となってからかいの対象として選ばれたと言える。また、ここで話者のJF1がSFに視線を向け、指さすことで、次の発話権の譲渡、つまり普段「2階に来ない人」の来ない言い訳や何らかの応答を期待している。しかし、07JF1の指さしと笑い、全員からの視線を受け、注目の的となってしまった「外から入った宇宙人」としては、この場でどうふるまうべきか躊躇し、11JF1のターンでは戸惑った表情でJF1とJF2を交互に見ている。この07JF1のターンでは、声を出して笑っているのはJF1だけで、他のメンバーは笑顔でこのやりとりを聞いて（傍観して）いる。

この事例では、JF1の指さしと笑いにより、一人の参加者（SF）にからかいの資源となるカテゴリー付与が行われた瞬間とみることができる。そして、そのカテゴリー付与、からかいに挑戦した当事者（JF1）は、それを行う際に笑いや沈黙、発話の淀み等で躊躇している。これは初回の緊張感と参加者間で共有する認識がまだ少ないことを示している。

5-2. からかいの挑戦と拒否・対立

07JF1の指さしと笑い、他のメンバーの視線的となり、応答に苦慮するSFに対し13AMが笑顔で「ねえ」と呼びかけ（からかい）、07JF1の言う「おもしろいメンバー」がSFであることを再度、明示化するとともに、SFに応答の産出が期待されるよう（呼びかけで）促している。SFはからかいを受ける者の反応の特徴であるからかいへの抵抗として沈黙しているが、その間、14JF1が13AMの発話を笑いながらくりかえし、このからかいに参加する。15SFは、AMに対し真面目な（怒った）表情で「ケンカしないよ」と



図4 16AM-19CM 「hhhh」

体を乗り出し、発話する。SFは13AMのからかいを挑発として受け止め、反撃に出る。その発話の直後、AM, JF1, JF2, CMは笑うが(図4)、硬い表情で横を向き怒りの感情を表すSFと、AMとSFの間に座っているKFは笑っていない(図5)。KFはAMとSFの間に挟まれ、SFの不機嫌な様子を間近で見たため、笑ってよい発話とは判断せず、困惑の表情で他の笑っている4名を見渡している(図4, 5)。SFの様子に他の4名も笑ってはいけな発話であったと気づき、1秒間の沈黙が起こる。

事例1-2 面白いメンバー#1 (2019年6月3日) 続き

- SF>JF1とJF2を交互に>>AM
 11 JF1: そう (0.6) [面白いメンバー
 12 JF2: 今, [(6時) かな ((後ろの時計を見る))
 AM>SF>><<AM
 13 → AM: [ねえ ((笑顔での発話))
 JF1>>>>>SF
 14 → JF1: ¥ねえ¥ hh
 SF>>AM ((体を乗り出して発話・顔の表情は不機嫌))
 15 SF: (ケンカ) しないよ
 KF>AM>>JF1>JF2>CM
 AM>JF1>手元に視線を下げる
 16 AM: [hhh
 JF2>SF>KF>手元に視線を下げる
 17 JF2: [hhhh hh
 JF1>>>AM>SF>>
 18 JF1: [hhhh hh
 CM>>>SF>窓の方へ視線を逸らす
 19 CM: [hhh
 (1)
 {事例1-3に続く}

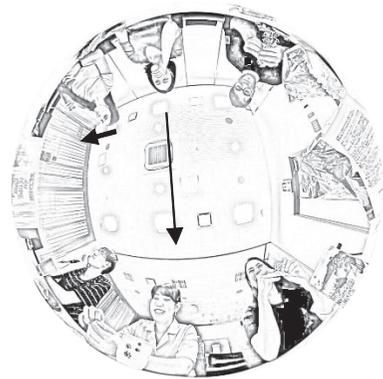


図5 笑いから1秒の沈黙へ

冗談や笑いを含んだ発話が行われる場合、笑いはその発話の後や聞き手が笑ってよいことだと理解できた時点で起こる場合が多く (Jefferson, 1974; Glenn, 2003), また、笑ってよいことを適切に笑えることは、その会話に参加する者たちの理解チェックに用いられることがある (Sacks, 1974)。ここでは、13AMと14JF1の笑顔や笑いを含んだからかいの流れから発話された15SFの発話を参加者は笑ってよいことと理解したが、SFの真面目過ぎる反応から、その理解が間違っていたことを示している。ただ、からかいの連鎖としては、からかいを受ける者がからかいを拒否する (Drew, 1987) という点では典型的な形で組織されている。

5-4. 「2階に来る」のからかいの再現

データ収集の前週に2階の共有スペースにおいてJF1のサプライズ誕生日会が開催され、CMが事情があり参加できなかった旨を伝えた後、JF1が参加してくれたメンバーにお礼を言う場面である。この任意のイベントにめずらしく参加したSFは、自身が夜遅く開催される誕生日会に参加するため、寝ないようにがんばって起きていたことを笑いながら伝えている。この国際学生寮ではRAを中心に頻繁に寮生の誕生日会を開催しており、多くの寮生（少なくともこの場にいる他の5名）はこれまでも頻繁に参加していることが共有

の認識であるとする、04/07/09SFの笑いながらではあるが、自分の頑張りを強調する発話を、度を越した自身への賞賛 (Drew, 1987) と解釈することができ、からかいが起こりうる場面である。初回のからかいの場面を鑑みると、JF1かAMがからかいに挑戦できる立場であるとみられるが、ここでは事例1でSFの不機嫌な応答に困惑していたKFが開始している。ただ、そのやり方は、直接SFに挑戦せず、JF1に視線を向けて開始している。KFは、JF1に対し発話をする形で、遠回しにSFに対するからかいを開始していることから、SFをともにからかう者としてJF1を選んでいるといえる。

KFは07/09SFの発話の間、向かいに座っているSFに視線を向けている。そして、10JF2、11JF1の笑いを受け、笑顔でJF1に視線を向け、12KF「めずらしかった」と発話をはじめ、「よね」でSFに視線を向け、KFを見ていたSFと視線を交差させる。そして、「その時間」で再びJF1に視線を向ける。そこで13AMが笑い、「SFを会うってことは」で、14JF1も「うん」と12KFの発話に応答することで、KFの仕掛けたからかいの意図を理解し、参加している。ここで自分の名前が発話されたSFは、自分がからかいの対象となっていることを理解し、真顔で視線を下げる (図7)。15KFが笑いながらその時間に2階でSFに会うことは人生で二度とない旨の発話をする、SFは笑顔になり、KFのからかひに対し、拒否も修正もすることなく受け入れている

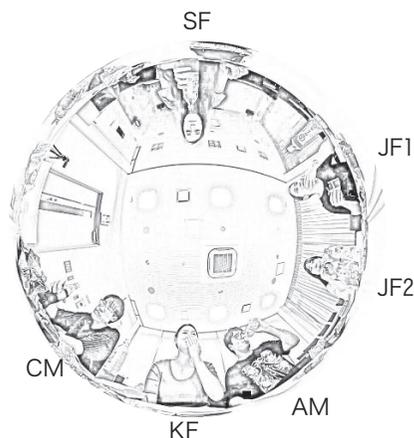


図7 12KF「SFを会う」



図8 15KF「お::hh」

この事例でKFは「めずらしく」2階の共有スペースで行われる誕生日会に参加したSFを、事例1で使われた「2階に来ない人」カテゴリーを再度付与し、そのカテゴリーを初回で付与したJF1を協力者に選び、からかいの対象としている。KFは、事後インタビューでSFのことを「引きこもりみたい」に「2階に来ない人」だったが、「関係が一番変わった」と語っている。この事例からも、初回から7回目のデータ収集の間に、二人の関係が遠回しではあるが、からかいを行えるまでに発展していることが伺える。また、SFが2階の共有スペースでの任意イベントに参加するようになったというSF自身の変化も伺える。

5-5. 遊びとしてのからかい後の失敗エピソード

以下は事例2-1の続きで、KFにめずらしく2階の誕生日会に参加したことをからかわれた後に、SFがその時の自分の失敗エピソードを語り始める場面である。SFが誕生日会に参加する際、それがサプライズであったため、急に呼び出され、お化粧を半分だけ落としたひどい状態で参加してしまい、後でその時の写真を見ると、鬼みたいであったという話である。この自己を卑下するような失敗エピソード（今田, 2015）を語ることで、SFは参加者の笑いを誘っており、また自身の弱み・失敗を自己開示することで、その後の話題の展開、それぞれの誕生日会での失敗エピソードにつなげている。

事例2-2 めずらしい #7 (2019年7月8日) の続き

21 SF: まあでも：なんかNちゃんが、すぐ(.) 2階にk-なんか来て：ってメッセージし [て

22 KF: [ん

23 SF: 私はなんか化粧を

24 JF1: うん

25 SF: うん、なんという日本語で

26 AM: とる?

27 SF: と [る?

28 JF1: [おと-落とす?

29 AM: 落とす

30 SF: 落と [す?

31 JF1: [うん

((両手で目の周りを指さす))

32 SF: 落とす中だったの↑で:: ¥2階にまだなんかここ [(xxxx) ¥hh

33 JF2: [hhhhh

34 JF1: [hhhhhhhhhh

35 AM: [hhhh

- 36 CM: [hhh]
37 SF: hh
38 JF1: hhhhhh
39 AM: hhh
40 SF: なんかその写真を見て、あ::、私、鬼みたい
41 JF2: hhhh
42 KF: え::
{以下略}

この事例は7回目であるが、それ以前にもSF（だけではなく他のメンバーも）は自身の経験や失敗エピソード等をしばしば語り、時にそれを笑いに転換している。こうした経験の共有や自己開示が6名の関係の変化に影響を与えていることがデータの観察からも伺える。紙面の関係で事例は提示できないが、以前のデータ収集回で話題にしたエピソードを再度取り上げ、お互いにそれを冗談にしたり、からかい合ったりする場面が複数見られ、そのからかいに対し、からかいを受けた者は拒否し、修正するようなことは少なく、遊びとしての対立（大津、2006）や笑ってよいこと（Glenn, 2003）にしていた。笑いは、事例1で見られたように、使い方によっては向けられた対象への攻撃と受け取られうる行為ではあるものの、参加者がともに笑うことで関係の親密化を可能にする道具ともなりうる。

6. まとめ

事後インタビューと実際の会話場面の分析から、データ収集の場である学生寮2階の共有スペースに外から入った宇宙人のようであったと自身を形容した留学生SFが、他の5名と親しくなったと感じるに至る契機の一つが初回のデータ収集開始直後のからかいにあることを示した。初回到学生寮の共有スペースである「2階によくいる人」である5名と「2階に来ない人」SFの対照的なカテゴリーが、それまでSFとの接触を試行錯誤してきたJF1によって、その会話の場で付与されていた。そして、JF1のSFに対するからかいは、この非対称性を資源とし、SFと普段接触のあるAMを共犯者として行われていた。それは「笑いや可笑しみを生む遊びの手段として疑似的に用いられ、ラポールの形成に貢献する受け手への攻撃的な発話」・行為ではあったものの、まだ親しいとはいえない仲であった者同士の間では、緊張感と対立を含むやりとりとなっていた。しかし、SFがからかいに対する真面目な応答（これまで2階に来なかった言い訳）をすることで、この非対称性は解消され、以降、このカテゴリーが再度付与されたのは7回目の一度のみであった。それは2階で開催されたJF1の誕生日会（任意参加のイベント）にめずらしく参加したSFをからかうため

あったが、初回とは異なり真面目な応答を必要とするものではなく、からかいを受けた SF は、それを自身の失敗エピソードへと展開させ、ともに笑うことに転換していた。また、この初回に SF に付与された「2 階に来ない人」カテゴリーを再度持ち出したのは、初回では SF と接点も関係性もなく、からかいにも参加できなかった KF であった。これは、1 回 30 分のデータ収集を数回行うことで、からかいが行えるまでに相互の関係が親密化したとも言える。ただ、「データ収集をともにする者」としての仲間意識が寮内外でそれぞれの接触の機会を増やした可能性があり、この関係性がデータ収集のみで構築されたものとは断定できない。また、この研究協力自体が 6 名の関係性の変化に影響を与えた契機となったとも言えるかもしれない。

データの観察からは、初回には緊張感が見られたものの、お互いの経験や価値観等を共有し、それを資源とし、以降の回に話題として再度取り上げ、からかいや遊びとしての対立、ともに笑うことなどを通して、相互の関係が徐々に親密化している様子が伺えた。

本稿では、個別具体的な、ある留学生をめぐる関係性の変化のきっかけを取り上げたが、他のメンバー同士の関係変化のきっかけやそのプロセスの記述も必要となる。また、本データ内には、からかいや遊びとしての対立、ともに笑うことで円滑なやりとりが行われているだけではなく、考え方や価値観が対立し、合意に至らない場面もしばしば見られた。そのような場合に、6 名がその対立をどのように解決し、あるいは解決せず話題を収束させているのかについても分析を進めたい。それから、事後インタビューで抽出されたキーワードには、本稿で取り上げなかった「お菓子」があるが、お菓子をめぐるやりとりにおける対立、また、思いやりややさしさの表明などが、6 名の関係構築に重要な役割をしているとみられ、その記述や分析も行いたい。

注

- 1) 杉原 (2010) は、相互学習型活動では母語話者が非母語話者の参加を妨げる現象や非対称的な関係性と権力作用がみられることを指摘している。岩田 (2005) は、相互行為の参加者が自律的にやりとりに参加し、会話の維持の役目を共有して相互行為を展開していることを対称的なやりとり、一方が主導権を取り続けていることを非対称的なやりとりとしている。
- 2) Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論では、他人によく思われたい、理解されたい、親しい者として扱われたい欲求のポジティブ・フェイスと自分の領域に他者にむやみに踏み込まれたくない、他人に邪魔されたくないというネガティブ・フェイスを人間の基本的な欲求とし、ポジティブ・フェイスに働きかける戦略をポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・フェイスを配慮する戦略をネガティブ・ポライトネスと呼んでいる。
- 3) ゴッフマン (2002: 5) はフェイスを「認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象」であるとしている。

- 4) ELAN (Version 5.9) [Computer software] (2020) Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics, The Language Archive. Retrieved from <https://archive.mpi.nl/tla/elan>
- 5) ユーザーローカル・テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) で分析を行った。

参考文献

- 今田恵美 (2015) 『対人関係構築プロセスの会話分析』大阪大学出版会
- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対照的参加へ—」『世界の日本語教育』15, 135–151.
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス: 「遊び」としての対立行動に注目して」『社会言語科学』(6)2, 44–53.
- 川上ゆか (2021.8) 「わかりあえるかどうかは実は重要ではない? 研究データ収集協力者の事後インタビューから見えること その①」Eajs2021 Conference
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析——「話し手」と「共—成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子 (編集) (2019) 『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
- 杉原由美 (2010) 『日本語学習のエスノメソドロロジー—言語的共生化の過程分析』勁草書房
- 田中共子 (2003) 「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認識の比較」『学生相談研究』24, 41–51.
- 團康晃 (2013) 「指導と結びつきうる「からかい」——「いじり」の相互行為分析」『ソシオロジ』58巻, 2号, 3–19.
- 西坂仰 (2005) 『相互行為という視点—文化と心の社会学的記述』金子書房
- 一二三朋子 (2006) 「異文化の友人・自他文化評価・自他の行動に関する信念が意識的配慮に与える影響——アジア系留学生及び日本人学生の場合」『筑波大学地域研究』26, 27–44.
- 水島理沙 (2006) 「日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析」*Human Communication Studies* Vol. 34, 53–72. 日本コミュニケーション学会
- 森本郁代 (2021) 「相互行為の資源としての異文化—日本人学生と留学生の話し合いにおける成員カテゴリー化の実践を中心に」『社会言語科学会 第42回大会発表論文集』189–192.
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38号, 100–115.
- 山田明子 (2016) 「多文化共生を目指した留学生・日本人学生によるグループ活動の実践—タスク達成プロセスの相互行為からみる多文化共生—」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 22, No. 3, 26–27.
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』第5号, 81–97.
- Drew Paul (1987) Po-faced receipts of teases. *Linguistics*, 25(1), 219–253.
- Glenn Phillip (2003) *Laughter in Interaction*, Cambridge University Press
- Jefferson Gail (1979) A Technique for Inviting Laughter and its Subsequent Acceptance Declination. *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 79–96.

Sacks Harvey, Schegloff Emmanuel A, Jefferson Gail (1974) A Simplest Systematic for the Organization of Turn-Taking in Conversation. *Language*, 50(4), 696–735.